

第5回プロジェクト研究会② 社会科における学力問題

話題提供者 センター研究員（東京大学教育学部附属中等教育学校教諭） 平野 和由

2001. 3. 3

社会科の低学力問題について報告します。中等教育学校というのは現在では国公立4校、14年度になると合わせて9校開校されるということで、非常にまだ少ないのですが、中学高校一貫の学校で、中学校を前期課程、高校を後期課程というんですが、学年は1年～6年というふうになります。私は附属で21年目になり、主に世界史、高校生の科目を担当しておりますので、今日は高校の方のお話をしたいと思います。具体的には2点について、学力問題をふまえてご説明します。

今の中学3年生が小学校の時に初めて生活科が導入された学年なんです、そのころから入ってくる生徒の質がかなり変わってきているなという印象がありまして、簡単にいえば基本的な学習の習慣、あるいは作業能力の低下というか、一枚の地図を色塗りさせても今までの倍の時間がかかって、そういうことが小学校で進行して今は中学校、次は高校という感じで、われわれも小学校の状況をきちんと知らない、今まで通りあがってくる生徒たちと同じような対応をしていくと大変なことになっていくということによりやく気づきはじめています。学校は変わっても入ってくる生徒は同じようなことで、そこが変わってきてしまうとうまく対応しきれないというのが正直なところ。小学校の社会科の時間はかなり減ってきているようです。ですから1年生の学期のはじめに社会科について聞きますと、ほとんどが社会科は嫌いだというのが圧倒的です。ですから、だいたい5、6年生の社会科の授業というのはそういう形になっている、非常にアレルギーや先入観があるので、その辺をまず壊して変えていって学習に対する関心をもっていくというのが中学の前期の課程では大事なかなと思っています。そして、後期になると基本的なこと、体系的なことを教えていくという考えでやっていかなければ難しいというのが、中学、高校で教えている実感です。

今回、20年間の定期考査の推移について21年分の生徒の成績資料を集計してみました。3クラスで120名ですが、なるべく同じ単元のところになるようにしてみました。結果的にこれをみますと、79年から学年の平均をとってみますと、下がっているとはとても思えない、むしろ

上がってきています。テストの内容の難易度を下げているのかということなのですが、テストの問題を全部見ましたが、特に自分がテスト問題を易しくしたという意識はありません。実際見てみた場合も、形式的にも内容的にも分量的にもそんなに違いはないというように思います。生徒自身がどう変わったのか、つまり学力が高い者が来たのではないかということもあるようです。附属学校では80年度入学生から選抜方法を変えております。以前は全員に学力試験を課して下4分の1をカットして、それから完全抽選という形を取っていました。ですから実感的に非常に上の子もいたけれども下の子もいたんですが、80年度生からは受験者数も増えたということもあって、最初に抽選を行って、その後学力検査を行ってほぼ上の方から取っていくということになっています。けれども、1983年から子どもたちが新しい選抜方式で教えた生徒たちなんです、その前後を見てもそんなに違いはない、要するに入試とその後の成績はあまり関係がないように思われます。

テストの方式なんです、まず前半の15分で60題の穴埋め問題という形式をとっています。15分経ったらこの回答は中止にして回収します。残りの35分は1題だいたい30分の問題で、単元をまとめさせるというテーマでやっています。テーマは事前に生徒に教えてあります。必要な子は全部これをレポートにしてもってきたら添削をするという対応をしています。80年ぐらいの生徒ですと、添削する生徒はだいたい半分ぐらいありました。女子生徒が7、8割でした。最近はそのようなふうにしても3分の1ぐらいしかもってきません。みんないいといわれたものを全部コピーしてしまいますので、不正行為が続出して、方式を変えざるを得なくなりました。ですが、数字の上では変わっていないのですが、体系的に授業についての生徒の力でずいぶん変わっていると思うことはあります。それは、一つは圧倒的に読書をしないということです。例えば授業のときに「風とともに去りぬ」を教材に使うのですが、20年前はだいたいクラスの女子はほとんど本を読んだり映画を見ていたので、その話をすると半分ぐらいは対応できました。今

年の場合ですと、そういう話をしても読んだことのある生徒が学年で1人です。ですから、授業のなかで小説の話をするのが非常に困難になっていると思います。それから、テレビも意外と見ていないようです。トレンディドラマとかバラエティーは見ているのですが、歴史的なものはほとんどみていない、NHKの大河ドラマも見ていません。では、漫画は読んでいるのかなというところ、例えば日本史の場合、戦後の文化というところで漫画文化が発達したというところがあるのですが、そこに登場する「カムイ伝」、「ベルサイユのばら」など、授業で共有できるようなものは読んでいないようでした。ですからいろいろ情報は身近にあるのですが、あるようで意外に自分のものとして中にはいっていないようです。自分にとって必要なものとか質のいいものというのを選択するという力が育たないのではないかと思われれます。それから教科書を見ません。読めないのです。世界史の教科書の文章というのは非常に難しいですから、まず漢字が読めない、それからレポートを書かせるのに長文が書けない、箇条書きになってしまう。それから社会意識全体が希薄化されていますので、学習の動機とか目的を持ってない、非常に社会的な関心というのが少なくなっているなというのが実感としてあります。

そこで、カリキュラムの変化と生徒の実情をあわせて、どうやったら学力を少しつけられるかなということで、科目構成を工夫してみました。5年生の必修科目の世界史と選択科目の日本史の両方を私が担当する機会がありまして、内容的に同じ時代を扱うように授業計画を取りました。特に戦後史の部分は、普通高校ではほとんどやられていない部分で、それもきちんとやろうということで実際に授業をしました。そして、日本史、世界史それぞれのテストの平均点をとって見たのですが、日本史と世界史両方あわせて集計したものと世界史のみの平均点を採りました。これを比較すると、日本史はあがっていないのですが、世界史はのびていました。同じ時期に同じように授業をするなどの、科目構成の工夫によっても学習の理解というのは少し深まるのではないかなと

思いました。ですから、他の教科で扱っている単元も内容が重なるところが結構あって、そこも調整することによって生徒の学習理解というのを深めていく可能性というのはまだあるのではないかなという気がしています。戦後史をやるにあたって、生徒にどんなことを学びたいかということ聞いたアンケートの結果がありますが、これを見ますと、一番は「ベルリンの壁崩壊」で、それから「ソ連崩壊」などが続き、世界史の大きな展開の問題というものに生徒は非常に興味をもっているのだなということに気がつきました。それからジョン・F・ケネディやベトナム戦争、これはいつも関心が高いのですが、この学年は英語の教材でアメリカの公民権問題をやったということで、キング牧師の暗殺なども興味があるようでした。キューバ危機などは例年でてこないのですが、最近のアメリカ映画の「30DAYS」の影響があって、非常に興味をもったようでした。それから湾岸戦争も中東戦争も沖縄サミットのときに中東和平会談の問題がかなりクローズアップされてきたので生徒の意識のなかにもあるということです。これをみますと、タイムリーな時期にこういう授業をとりあげていくということが必要なのではないかなと思いました。

最後に、生徒の卒業研究のテーマの傾向について見てみたいと思います。卒業研究とは、5年生から6年生の1年半で自由研究をするというもので、附属学校では集大成の取り組みとして位置づけられているものです。今年度卒業研究に取り組む子どもたちをみて感じることは、一つはテーマを決められない生徒が非常に増えてきていることです。また、テーマについても自分の身近な問題を取り上げる子が非常に多くなっており、大きな視野でのテーマを取り上げる子が少なくなっているなという印象を受けます。それと、テーマとして少年犯罪、環境、福祉などが多くなっています。こういう意味でも、今の日本社会の状況などに対して、生徒の意識の中にはかなり鋭敏に反応があるのではないかと考えられます。そういうことを掘り起こして授業を作っていく必要があるのではないだろうかということを考えています。